

ニコライ・ハルトマンの『範疇法則』による観念論批判

永 島 輝 雄

目次

一	序論	此岸の意味解明
二	(1) 観念論と实在論との此岸	
	(2) プラトン・アリストテレス批判	
	(3) 主観主義と客観主義との共存	
三	観念論批判	
	(1) 概念主義と合理主義	
	(2) 範疇法則の根本的意味——相互制約性	
	(3) 物自体と現象との共存	
四	観念論克服	
五	結論	

一 序論

ハルトマンは「観念論と实在論との此岸」(Diesseits von Idealismus und Realismus) を主張することによって、

ニコライ・ハルトマンの「範疇法則」による観念論批判

認識論的立場を捨てた存在論的見地を問題学的に成立させている。無立場から現象をあるがままに直視しようとする彼の学問的態度は、確かに科学的手法と一致している。しかし果してハルトマンのいう「此岸」がこの無立場を意味するものかどうか、これが問題である。

ハルトマンは学問方法論として「範疇法則」(Kategoriale Gesetze)を取り上げている。範疇はアリストテレスの十範疇、カントの範疇論によってもわかるように、哲学史上の重要な哲学用語である。アリストテレスの範疇論は存在論的、實在論的であり、カントの範疇論は対象一般の思惟形式として観念論的である。前者は實在論的な対象形式を、後者は観念論的な把握の形式を考えている。これに対してハルトマンは、範疇そのものの持つ本来の意味を解明することによって、観念論か實在論かという二者択一的な問題解決の仕方に、反省、検討を加えている。

ハルトマンは観念論と實在論との対立以前に立ち返り、そこから改めて哲学的問題を無立場の見地から取り上げている。体系的哲学者は、体系を重視するがために問題があるがままに取り扱うことができず、自己の哲学体系に役立つ問題しか見ようとしな^い。そこには問題の局限化、制約化があり、世界を単一化して解釈する偏見の誤りが潜んでいる。

観念論、實在論も体系的認識原理に従って世界を局限化して解釈しようとする限り、この偏見の誤りという汚名を受ける。一つの立場に立つ以上、この偏見という汚名は拭いきれないことになる。ハルトマンは自己の存在論的見地を、観念論と實在論とに中立なものとい^っている。そこでこの中立性が此岸ということの意味にもなり、存在論の基本的態度を表現するものとなる。しかし単に中立的立場に立つとい^えば、それは問題の糊塗、欺瞞と考えられる。本

来の意味はそのような政治的問題解決ではない。

ハルトマンは観念論か實在論かの対立に、解決を与えようとしなない。これがハルトマンのいう中立性の第一の意味である。従って、観念論と實在論との対立を総合する第三の哲学的見地——彼岸——に立とうとするものでない。むしろ観念論も實在論もという両者肯定の場の中に、哲学の此岸を見出そうとする。そこにおいて観念論も實在論も存在論的地平の中で検討し直されて、その中で新たな存在意義が認められる。

このように観念論、實在論を包括する存在論的視野においては、確かに立場は消失している。しかし問題は、その中に實在論的要素、観念論的要素が復興していることである。中立性の意味をこのように解釈すれば、ハルトマンが観念論に対していかなる立場に立とうとするのか、観念論は果して克服されているのかが疑問点となる。この疑問点をハルトマンの「範疇法則」から解明してみたい。

二 此岸の意味解明

(1)

彼岸を取り扱うことは、人間の認識能力を超えた領域に立ち入ることになる。これが従来の形而上学における問題点である。ハルトマンのいう此岸とは、彼岸の排棄でなく、立場以前、主観性の排棄を意味している。それは一つの立場によって一つの特定の判断を下すことを中止し、現象そのものを立場から離れて取り扱う態度である。この立場以前という見地を、超歴史的、超時間的、超立場的といっている。これは観念論、實在論という限定された一面的領

域に閉じこもらずに、問題を無限の多面的な領域の中で見直すことを意味している。これが此岸の領域である。

ハルトマンは体系的哲学者として、プロチノス、トーマス、スピノザ、フィヒテ、ヘーゲルを挙げ、問題学的哲学者として、プラトン、アリストテレス、ヴィンデルバント、カントを挙げる。体系的考え方からは問題を見損うこと、これにハルトマンは批判の目を向け、固定した一つの立場に固執するのを深く戒めている。しかしハルトマンは体系を完全に否定していない。体系から問題を取捨選択することを否定したのであって、問題追求の結果、体系の生ずることを否定してはいない。しかしこの体系は固定化せず、絶えず新しく形成し直されるものとして流動的である。

体系的哲学者に対する批判は同一視の誤りに帰着する。それは一元要請の偏見 (das Vorurteil des Einheitspostulats)、存在論的——論理的同一の偏見 (das Vorurteil der logisch=ontologischen Identität)、原理と本質の同一視の偏見 (Gleichsetzung von Prinzipien und Wesenheiten) を代表している。ヘーゲルを頂点とするドイツ觀念論は思惟と存在を同一視して、「主観的なものと客観的なもの」「理性的なものと現実的なもの」との同一哲学を標榜している。その結果、範疇と本質とを同一視することになり、現象の多様性を見損うことになっている。

この同一視の誤りを「範疇法則」から基礎づけるならば、基本的誤り——層見誤り——を犯している。更にこれを詳述すれば、現象が多様な異質的な層の形成物であることを無視して、これを一元論的に単純化して解釈することに、層独立性の法則違反が追求される。これが同時に異質的な各層を同質化することによって、層距離の法則違反となり、更に、一つの法則によって全体層を単純化することによって、層依属の法則違反となる。

これらの法則の意味するところは、多様な現象を一面化する誤りを指摘することにある。立場、体系がかかる一面

」
化を要求し、ここに問題の局限化が完成する。この場合の体系とは飽くまで思弁的立場を意味し、従って体系的哲学者とは観念論者を指示している。思弁が論理的体系を要求し、これが存在を局限化して、あるがままの存在を見損い、遂には、思惟と存在を同一視して、これを観念論の信条としてしまふ。

観念論は思惟を存在の上位に置くことによって存在を見損い、實在論は思惟を存在の下位に置くことによって思惟を見損っている。思惟と存在とは水平的対等関係にその本来あるべき位置が求められる。その関係は認識範疇と存在範疇との全面的一致でなく、それらの部分的一致に存在論的基礎をもっている。従って観念論者は認識範疇のみによって世界を解釈し、これを世界との全面的一致と考えるために、認識範疇とは異質的な存在範疇の深み、存在の背景を全く無視している。認識範疇だけでは認識問題を正当に取り扱うことはできない。認識には、常に認識範疇と存在範疇との積極的な関係が前提とされている。

観念論的体系とは認識範疇の領域に属するもので、これをそのまま存在範疇そのものと思い込むことは、観念論の大きな弱点である。認識範疇のみならず存在範疇にも体系がある。但し認識範疇のそれとは根本的に異質的であるがため、部分的に一致するのみである。認識とは体系を思弁的に構成することにあるのではなく、体系を存在論的に把握することにある。従って体系を部分的にのみ把握するにしても、体系の自体的に存在することを疑うことはできない。ヘーゲル弁証法においても、それは世界の本質を意味している。弁証法はヘーゲルにとっては対象形式と掛け離れた主観の勝手な捏造ではない。しかし認識不可能の余地、非合理的なものの領域を残さないのは、彼の哲学が余りに思弁的であることの証拠となろう。

認識の成立する領域は部分的一致の存するところに限定される。換言すれば認識範疇の達する範囲内でしか認識できない。この認識可能性の限界に直面し、その限界の彼岸に物自体を設定する。カントの思考によれば、認識できる範囲は現象界のみであって、物自体に及ばない。カントはこの解決のために、実践理性の優位を必要としたが、ハルトマンはこれを否定し、純粹認識の進歩発達する可能性を認めている。

現象するものの背後に物自体は当然、自体的に存在する。現象だけあって物自体の存在しない訳はなく、又逆に現象なくして物自体だけが存在する訳がない。このハルトマンの考え方からすれば、観念論と实在論との共存が存在論の地平から承認される。対象それ自体が観念的か實在的かというのではなく、対象に関する主観の態度が先験的か、経験的かということである。対象それ自体は観念的でも實在的でもない。ここにおいて、「観念論と实在論の此岸」が、対象それ自体に関する超主観的な立場といえる。

(2)

ハルトマンと同一の立場に立つとみられる問題学的哲学者、プラトン、アリストテレスに対して、ハルトマンは次のように批判する。プラトン思想にみられるアイデアの世界と現象界の分離は、二つの世界の対立、すなわち二元論となる。しかもこのアイデアの世界は、現象界と無関係に自体的に存在する理念的本質の世界を形成し、現象界と対立してこれを支配し規定する原理の世界となる。これによってアイデアの世界と現象界との密接な関係が認められなくなっている。

二元論に対する批判は原理の法則からなされる。原理は具体的なものなしには無であり、逆に具体的なものも原理なしには無である。従って原理の世界、イデアの世界が現象界から独立して存在できるという思想は、この原理の法則違反となる。原理は具体的なものに対してのみ原理であり得る。具体的なものに対する以外には原理たり得ない。それゆえに、彼岸に自体的に存在するイデアは現象界に対して原理たり得ない。すなわち両者の関係は相互依存であり、共存関係である。

ハルトマンによれば、プラトンはこの分離の誤りを克服し、逆に余りに行き過ぎた同質性を両者にもたせてしまっているという。すなわち現象界は模型、影像であり、イデアは原型である。両者の関係は分有において、イデアが現象界へ下降することとして表現される。現象界のすべてはイデアの世界から与えられたものであり、これによって現象界はイデアの世界そのものとなる。これがハルトマンのいう同質性の偏見^⑤(*das Vorurteil der Homonymie*)である。

ハルトマンはイデアと現象との対立は撤廃されるべきではないといっている。原理の法則によって表現される原理と具体的なものと対立は、プラトン思想においても保持されるべきだという。同一視の偏見にもならず、分離の誤りにも落ち入らないこの両者の対立は、依存しつつ独立なる共存関係を示している。もちろんプラトンにもこの思想はみられる。イデアの錯綜によって現象界の多様化が生ずるという彼の説によってである。

イデアは相互に錯綜し合い、包含し合う関連の中にある。これを見ればイデアは無となる。すなわち自体的に独立したものでありながら相互に包含し合って、全イデアは個々のイデアの中に代表されている。これを示す法則は、

範疇の水平的関係を表わす凝集法則の一部包含法則である。この法則だけでは、イデアの凝集的決定を水平的にのみ取り扱うことになり、垂直的なイデアの関連を見失うことになる。プラトンはこの垂直的関連をイデアから現象への移行と考えたが、これがハルトマンによって同質性の偏見と批判されている。

これに対してアリストテレス批判は、形相と質料の二元論から始められる。形相を全く含まない第一質料は、形相の実現のみを現実性と考える立場からいえば、現実的なものではない。それは物において特殊化されている。また質料を全く含まない純粹形相についていえば、質料の原理を全く含まない純粹形相の原理を、世界の原理とすることはできない。形相のみを本質であると考え思想には、それが質料と調和しない欠点が存在する。原理の法則における依存関係がアリストテレスの思想には欠けている。これがために、基体を重視した反面、関係を軽視したというハルトマンの批判を受けることになる。

かくしてアリストテレスの形相主義は質料と形相を同質化することになり、プラトンと同じく同質性の偏見をもつことになる。プラトン、アリストテレスが世界を同質化した思想の根底にあるものは、範疇を本質と同一視するという偏見に由来した目的主義である。プラトンにおける善のイデアは、世界の最高価値として世界を規定する目的の性格をもつ。またアリストテレスにおいても、純粹形相としての神が愛されるという形で世界を動かし、すべての存在者は神を愛することによって動かされる、目的的运动が示されている。そこでは世界の運動が形相の実現であり、神を目差して発展する生成過程であると理解される。世界の一切の現象に対して、「何の為に」と問う目的論的思考は、層依属の法則違反である。観念論は高次の原理を不当に低次の存在に適用し、唯物論は低次の原理を不当に高次の存

在に適用している。これは基本的誤り——階層見誤りの過ち——を犯している。そしてこの階層の見誤りが層依属の法則違反の原因である。目的主義は、自らの限界領域を超えて、自己の原理を他の領域に適用するために、世界に階層の存することを見損っている。観念論、唯物論も同じく一つの範疇適用において、限界逸脱の誤りを犯している。

目的主義は、高次の原理によって低次の存在を決定づけることになり、これは層独立性の法則違反である。低次の存在は高次の原理なしにも保持されるが、逆に高次の存在は低次の原理なしには保持されない。目的論が高次の原理として、低次の存在に逸脱して適用される誤りは、この強さの法則違反によって証明される。

(3)

ヘーゲル、プラトン、アリストテレスに共通する思考様式は、高次の原理によって低次の一切の存在者を決定すること、すなわち目的主義にあることが以上によって判明する。ハルトマンはこの目的論を擬人観であるという。つまりそれは人間のもつ原理によって一切の自然物を方向づける立場である。ここにおいて目的論、擬人観、観念論の間に円環的連結が認められる。しかも彼岸性をもったプラトン、アリストテレスの思想に目的主義があり、同質性の誤りがあるとなれば、観念論者ヘーゲルとの思想的近似性をそこに認め得る。

プラトン、アリストテレスには、人間の原理を超人間界の領域——彼岸——に及ぼす思考形式がある。神の原理によって人間界及びその他一切の自然界を規定し決定づける神学が、彼等の思想の基礎に存してはいるが、目的論理によってそれは逆に、人間を底辺として下から上へと方向づけていることになる。ハルトマンの問題とする形而上学

的領域は、神や靈魂についてではなく、存在するものの意味である。この存在するものの領域が此岸である。

ハルトマンは概念性の偏見^⑥(*das Vorurteil der Begrifflichkeit*)をこの目的主義の中に認めている。この偏見によれば範疇は概念であり、同時に本質と同一視される。そこでは範疇は概念形成されて、合理主義によって世界と一致せしめられる。しかし世界には非合理的なものが残存し、概念的範疇によっては単一化されない謎も発生する。この領域を認めることは、概念範疇が対象範疇へと拡大したこと、つまり観念論から存在論への移行を意味している。

対象には対象固有の原理があり、これは主観の原理とは完全には一致しない。従って非合理性は非存在ではなく、不可認識性の領域に属する。そこで認識可能性の領域、すなわち認識範疇と存在範疇との一致の領域を拡大し、合理的領域の限界において非合理的領域に直面することが、正しい存在論的地平に立つことになる。非合理的なものの存在が、対象を主観に対する、主観あつての存在たらしめず、主観に独立な自体存在するものの性格を対象に与える。この自体存在するもの——物自体の承認は、観念論から実在論への変化である。そして物自体を主観に対する彼岸に成立せしめる哲学者は、カントである。しかしカントは、実践理性による体系的概念構成の立場で物自体を要請する。これに対してハルトマンは、純粹理性の領域で物自体を認識対象として、思惟でなく存在に関する事柄として取り扱う。これが物自体を此岸で把握することの意味になる。

物自体の存在を彼岸に要請するのは、二元論のもつ分離の誤りを犯す。これを結合の形で物自体を現象の領域、すなわち認識の地平に移行させることは、物自体を此岸で取り扱うことになる。カントは物自体を要請という形でしか承認できない。まして物自体を認識の対象にすることは、カントの学問方法論からは全く不可能である。カントは極

めて控え目な地道な考え方をするが、ハルトマンはかえってカントの学問的限界を超越して、物自体を認識の対象に指定する。

確かにカントに対するハルトマンの批判は、カントの控え目な思考態度と、そのために、かえって観念的になったカントの哲学的論理性に向けられている。認識できるか否か、どの程度認識できるのかが従来の哲学問題とせられ、これが物自体を彼岸視させる結果になっている。しかし物自体はすでに認識の領域において、対象問題として提起され、認識対象として認識されつつある。哲学問題は対象の認識でなく、認識の対象である。但し全面的な一致でなく、部分的な一致として謎が発生している。この謎の発生が認識の生起である。

此岸においては、主観の原理を無視した客観の把握は存在しない。逆に客観の原理を無視した主観の原理の弁証法的展開は、認識ではない。認識においては主観と客観は、相互に対立する反対極でありながら、共存している。もし主観と客観が全く同質であり、全く異質であれば、両者の間に認識関係は成立しない。同質性が両者の独立性を奪い、異質性が両者の共存性を失わしめるからである。両者の間には独立性と共存性が同時に前提されている。観念論の根源をなす体系、合理主義は主観の原理として保存され、实在論の根幹をなす彼岸性も客観の原理の中に保持される。かくして観念論が、实在論かの対立は、此岸の領域の中で相互に共存して、どちらが上位か下位かに関係なく併置される。

ハルトマンは観念論か实在論かの対立に同質性の誤りを指摘し、両者を主観の原理たる目的主義に帰一せしめる。しかも両者は主観の原理——目的主義——を学問方法論として、この主観の原理を客観の原理と同一視したことにお

いて、両者の思考は一致している。これによって両者は主観中心の解釈となる。ハルトマンにおいては、神や靈魂の存在の問題ではなく、この人生と自然における謎の解明こそが、人間の認識能力にとって果し得る領域である。そして現象の中に隠され潜む世界の基礎、原理を発見し把握するためには、現われているものから隠されたものへ、与えられたものからその背後にあるものへと、範疇分析を展開することが必要である。これは凝集法則特に包含法則によって可能であり、かくして未知なるものの先取が直観によって果され、ここに範疇分析の実り多き成果が期待されることになる。

三 観念論批判

(1)

プラトン、アリストテレスは彼岸の領域を哲学思想の中に取り入れて、彼岸によって一切の存在者を決定づける。ハルトマンはこの思想構造の中に目的主義の存することを見抜き、これがために同質性の誤りを犯すと指摘する。目的とは神のもつ目的ではなく、人間のもつ目的として思考され、これが目的主義を擬人観と称する理由となっている。しかしこのためにプラトン、アリストテレスを観念論の類型に入れることはできない。彼等は客観による主観の決定を思想構造の基礎に置いている。これに対して観念論は、主観による客観の決定を思想特徴としている。この点に

において両者は全く相対立する思想である。しかしその発想において共通するところがある。ハルトマンは神や靈魂という彼岸の領域に属する問題を哲学的対象としていない。飽くまで此岸、現象から世界の原理を把握しようとしている。

このことはハルトマンが世界の實在的構造を四つに区分し、無機物、有機体、心、精神の上層に神を設置していないことによつて明らかである。これに対してアリストテレスの階層説においては、最上位に神があり、神が下位のものの一切を支配し決定づけるという神中心の世界構造を形成している。ハルトマンによれば、精神の上に何らかの層に存することは否定できないが、これを解明できないとしている。これを強いて解明しようとすればそれは認識論的把握ではなく、人間の精神構造からする概念構成となる。それは神の擬人化となり、同質性の誤りとなる。

この点で實在論は目的範疇による上への限界逸脱となる。神には神の原理があるならば、これをいかにして解明、分析するのかが問題である。人間は人間である限り、人間の範疇においてしか神を理解できない。しかも神の範疇が明晰に分析できない以上、そこに目的性があるかないかが判明しない。これではハルトマンの批判した擬人観は不明確な言辭となる。批判できる余地さえ失っている。さて觀念論に対する批判はどうであろうか。そこには人間の範疇による下への限界逸脱が見らる。しかし下位の領域は現象の世界である。この領域は神の国とは相違して、分析、解明のできる實在構造を明白に示している。層距離の法則によつて因果連関と目的連関が明瞭に対立して、層の連続的移行を不可能にしていることが、明確に分析できる。

この事実によつて明らかになるのは、實在論における主観の原理の活用である。哲学的理論構成においても主観の

原理を無視した自体性の把握は存在しない。同時に観念論においても主観の原理が最大限に拡大されていることは論ずるまでもない。かくして認識が生起するためには必然的に主観の原理が前提されるが、しかしこれがために観念論という非難を浴びせるのは当たらない。主観と客観が水平的共存の場に対立して、認識が正当に生起するがゆえに、この主観の定立は決して観念論の復興とはならない。もっとも観念論的要素の再起はあるにしても。

ここにおいて観念論に対するハルトマンの批判に耳を傾け、これによって正しい主観の原理活用について学ぶ必要がある。観念論批判の第一は、同一視の誤り、目的主義、擬人観ということであるが、これらの根本的誤りは概念構成である。それは範疇における非合理的要素を認めない合理性の偏見をもち、これが概念性の偏見に根差す規範主義へと強化し、ついには主観と客観の同一視というヘーゲル弁証法となって完結する。

合理主義とは対象と不一致な概念構成をすることによって、対象の原理を分析し、発見するという把握的認識を全く無視する点に特色をもつ。これは正当な認識ではなく、虚構である。これを正しい認識次元に戻すためには、主観も客観もそれぞれ範疇をもつという事実から始めなければならない。しかも両者が分離的平行関係でなく、部分的一致の関係で認識されるならば、主観の権限越境も消失し、客観が自体的に存在把握されるようになる。客観そのものは、主観がいかにか虚構的に概念構成しようとも、変化なく存在する。変化するのは思惟による構成物である。かくして一つの世界に対して多数の世界観が存在するようになる。世界そのものに矛盾はないが、世界観には矛盾対立^⑦ (kontradiktorische Gegensätze) がある。矛盾対立は思惟の領域に属するからである。

このような過誤を犯す思惟といえども、これが精神の一翼をにない、主観の原理の根本を形成するものである限り、

これを唾棄すべき理由はない。これを本来あるべき位置にいかにして戻すか、またそれによって認識はどうなるのか
が問題である。認識範疇はアプリオリに対象を認識する条件に過ぎず、依然として認識されないままであるという。
それは純粹悟性概念でなく、従って意識における概念構成をしない。しかも認識範疇が合理的なのではなく、認識範
疇と存在範疇との一致したところが合理的領域となる。

合理性は論理的意味でなく、真理と一致せる意味で、可認識性である。非合理的な領域は両範疇の一致しない領域
——非真理性——として、不可認識性である。従って認識範疇に思惟の入り込む余地はない。もし入り込めば、それ
は観念論となる。

(2)

ヘーゲル弁証法に対するハルトマンの批判は概念性の偏見に代表される。この概念性の中に目的性、合理性が含ま
れることは先きに説明して来たが、更にこれらに調和要請の偏見^⑧(*das Vorurteil des Harmoniepostulats*)が附加さ
れる。これは二律背反の解決を求める問題意識である。カント、ヘーゲルのそれとの苦闘は、決して真の解決とはな
っていない。それは思惟の錯覚であり、論理の瞞着に過ぎない。解決は二律背反の真でないことの証拠である。存在
の二律背反は解決されない。二律背反の発生は存在に属すべきこととし、その解決は思惟の領域に入るとしている。

何故二律背反が生ずるのか、これは説明のつかないことであり、むしろこれを強いて調和しようとする思惟の中に、
形式論理学に基づく思惟の誤りを認める。矛盾律は矛盾の対立を否定するがために、ヘーゲルの止揚においてこの矛

盾は解決されるという論理は、存在のでなく、思惟の弁証法となる。存在の二律背反は思惟のもたらす解決に何らの影響を受けないからである。これによって存在に属するものは変化なく、思惟に属するものが変化することがわかる。従って観念論、實在論は思惟の側に属し、それらの此岸は存在そのものとなる。

しかし存在そのものに二律背反があるのは、存在における非合理的なものの承認とはならない。もし思惟法則が論理法則であるならば、思惟には誤りがない。誤りがあるのは論理法則以外の心理法則に思惟が従うからである。論理法則は一次的には理念法則である。これによって論理法則は原理法則となる。この原理の支配する存在は合理的となるが、それ以外の領域は非合理的となる。これでは具体的なものはその依属する範疇層によって残りなく完全に規定されるといふ層決定の法則に違反する。しかも認識の進歩による合理性の拡大の意味も失ってしまう。

二律背反は確かに非合理的に見えるが、しかしこれを解決に導くことはかえって存在そのものの論理法則に背くことになる。調和要請は論理法則でなく心理法則に基づく。従って二律背反の中に論理性を見抜くのは、これを合理主義へと引き戻すことになる。そこでは二律背反は矛盾対立でなく、**反対対立**^⑨(*Konträre Gegensätze*)と考えられる。この対立は二者択一でなく、共存の形式を保ち、その対立の間には裂け目はなく移行がある。二律背反は矛盾をもつ——これは思惟の世界においてのみ可能である——ものでなく、併存的、共存的対立をもつて、實在的世界の論理的構造を形成している。

この対立的共存形式を可能にするのは包含の法則である。対立し合うものが相互に共存するのは、一方が他方の本質の中に含まれることが条件となっている。プラトンの凝集理論にはこの法則の展開が見られるが、ヘーゲルの論理

学には、対立が矛盾的契機によって目的的に総合へと上昇するがために、現象の多様性を隠蔽し、包含法則に違反する事実がある。目的論的に上昇、発展するヘーゲル弁証法は結局依存性の把握をしていないことになる。水平的凝集と垂直的依存の関係がヘーゲル弁証法には欠けている。

更に重大な誤りをハルトマンは指摘する。ヘーゲル弁証法^⑩には高次のものに対する低次のものの依存形式があり、これがために下から上へと弁証法的に上昇、発展する目的主義が発生しているという。これは範疇的根本法則すなわち強さの法則に違反している。高次のものは低次のものなしには存在し得ないが、低次のものは高次のものなしにも存在し得る。これは低次のものの高次のものに対する強さを表現している。しかし観念論においては、この関係が逆転している。しかも低次のものは高次の決定にかかわりなく、自ら独立して決定をなすという層独立性の法則にも違反している。

目的論においては高次のものが存在層の基礎となるが、強さの法則においては低次のものが存在層の基礎であり、そしてそれが上部へ向けて再現する限り、高次のものの要素、または存在基礎であり得る。観念論は精神の自由を強調する余り、自由の本来の意義を見失っている。高次のものは低次のものに依存してのみ、そのものの自由が保証される。そこに絶対の自由を考えれば、強さの法則、層独立性の法則、質料の法則に違反し、垂直的依存関係の把握ができていないことになる。自由は高次のものだけでなく、低次の層それぞれに自由が求められる。これは層独立性の法則によって明らかであり、更にこれを証拠づけるものとして層距離の法則が挙げられる。

層距離の法則は各層に割れ目を作り、連続的移行を不可能にするが、再現の法則は各層の移行を可能にし、更に新

規なもの法則はこの再現が連続的でなく、飛躍的移行であると補足している。新規なもの出現は精神の自由を保証づけてはいるが、この新規なものも低次のものの強さによって制限づけられている。かくして範疇法則群は各法則間の相互制約性によって成立しており、従って相互に補足関係を保ちながらそれらの意味を限定し合っていることがわかる。強さの法則のみでは真理の片面しか語れない。これに対して自由の法則がこの強さに条件づけをする。逆に強さの法則も自由の法則を制限づけている。無制限の強さを主張すれば唯物論となり、絶対の自由を強調すれば観念論になる。このように強さと自由の意味は相互に制約し合って本来の存在関係を表現している。

(3)

ヘーゲル観念論の功績は精神の自由の高揚にある。しかしこれを世界原理の弁証法的展開と同一視したことは、概念構成による世界単一化の誤りとなる。それは一つの実体で世界を理解することになる。今日の範疇分析はまだ精神の高みまで達していない。これによって範疇分析の限界逸脱は、概念構成という批判を受けることがわかる。形而上学は目的主義によって範疇分析の彼岸へと主観的解釈を拡大し、客観の原理を無視している。従ってこのような世界の一層的理解から精神の自由は説明できない。少なくとも世界を二層と考える^⑪ければ、そこに自由は了解されないとハルトマンはいう。

カントは現象と物自体の二層的世界を哲学的構図としながら、結局、形而上学的偏見——同一視の誤り——に落ち入っている。カントの功績は認識に範疇問題を取り入れたことにある。しかし相変らず範疇を概念と考え、範疇と本

質との同一視を犯している。これは範疇を純粹悟性概念と考える主観化であり、同時にそれを存在原理と考える客観化である。このために現象を物自体は平行関係に対立しながら、連結しているという二律背反の思想となる。これは思想的生産による虚構であるがために、これを真の認識関係に戻すには両者を交差関係で把握し直さねばならない。

範疇が越境の危険をもつものであることはカントも認め、このために範疇の適用を可能な経験の対象に制限する。同時に観念論、實在論にみられる範疇的越境の弊害を除去するには、概念構成による主観主義の拡張を制限し、これらの思想的圧制から範疇を解放することが必要である。この場合の制限とは思惟範疇に対するものであって、認識範疇に対してなされるものではない。従って純粹悟性概念としての範疇に越境の危険性があることは否定できない。カントが観念論の思惟形式に対して与えた制限が、自らの思想にも適合するのをカントは知っていない。カントにおいては対象は意識の構成物であり、先験的統覚による綜合体である。

これに対して綜合体は意識外の対象領域にも存在するとハルトマンは考える。すなわち先験的感性形式としての時間、空間、そして純粹思惟形式としての範疇は意識外にも存在する。もし存在しないとすれば、それは認識でなく、思惟の生産となる。認識は認識するものと認識されるものとが必ず前提されねばならない。カントの物自体成立に関する極めて控え目な論理に対して、ハルトマンは現象に現われる物自体を認識することなしには、現象を認識できないと主張する。

思惟構成の場でなく、認識の場に立てば、認識するものとしての認識範疇と、認識されるものとしての存在範疇とは同時に成立する。そして認識範疇は存在範疇との不一致に認識可能性の限界を認める。しかし認識範疇は存在範疇

から得られたものでなく、アプリアリーの性格をもっている。すなわち存在範疇による認識範疇の訂正を意味しない。これはカント観念論の復活である。この認識範疇の認識は極めて困難事であり、ただその作用を知るのみである。従って認識範疇は認識から独立的なものとなる。この性格は対象範疇にも適合するために、認識するものは両者の作用のみを知り、その一致した領域に合理性を認めるのみである。

変化する思惟形式としての観念論、實在論に対して、認識から独立不変な存在法則としての範疇論によって、ハルトマンは世界の実在構造を分析しようとする。この企図は範疇を物自体として、しかもこの物自体を主観にも客観にも存在させることによって、観念論、實在論を擁立することになる。論理主義、概念主義の否定は廃棄でなく、制限付肯定である。但しこの論理性が全世界を決定するのでなく、理念の法則を媒介として實在的世界の論理性と一致する限りにおいてである。観念論、實在論は範疇論を媒介として真の対立が可能となり、かえってそれらの共存が確立する。

自由を精神だけでなく、その下層のそれぞれに認めたことは、ハルトマン哲学の功績である。観念論はこれによって自由の意味が制限づけられる。實在論においても分離せる物自体の定立でなく、現象との依存関係で物自体が自体存在する。この共存関係の保持は、観念論の上からの越境を認めるということではない。目的的解释は層依属の法則によって制限さるべきである。無機体は因果法則、精神は目的法則、その中間にある心と有機体は不明であるが、それらの層に依属した法則によって規定されるべきである。範疇法則は観念論、實在論にそのあるべき位置を教え、その越境解釈に制限を加え、その機能を純粹ならしめる。観念論において使用された二律背反、弁証法、先天性は範疇

論においてもその意味を変えて使用されている。

四 観念論の克服

ハルトマン論理の特徴は、思惟と範疇（存在）との峻別である。弁証法においても思弁的弁証法と範疇的弁証法^⑫（Spekulative und Kategoriale Dialektik）とを区別して、後者によって範疇的凝集が把握されると主張する。概念上昇的運動、発展でなく、範疇法則における依存と独立の共存関係が、範疇的弁証法となる。従って正、反、合の解決的図式をもたず、無解決の反対対立の中に弁証法的関係を直観することが、範疇論の目的となる。この弁証法は概念運動でなく、対象原理である。従って弁証法は主観に属するものでなく、客観に属するものとなる。しかし認識関係成立のためには、弁証法は主観にも客観にも存在することになる。

主観に存する弁証法は、認識範疇に属し分析不可能の領域に入る。但し認識範疇と存在範疇との一致せる領域で分析された範疇法則が、その一端を見せるのみである。認識範疇が何によって構成されているかは知られていないが、発展の弁証法に対する存在の弁証法が語られていることは確かである。そしてそれは多様性の承認となり、遂には発展の弁証法すら承認せざるを得ない自己矛盾に陥ち入っている。何となれば目的論こそ人間の根幹をなす基本範疇である。そこに発展的に自己を決定づけ、生きる意味を見出そうとする人間の生き方は否定できない。共存の生き方で人間の全精神を統一できない。これは自ら単一化の誤りを犯すことになる。

ハルトマンは世界の実在的構造を四層に区分する。この世界領域では範疇法則は効果的に適合している。しかし問題は人間領域においてこの範疇法則がいかに適用されるかである。人間は世界の四層を具現したものとして世界そのものである。人間はどの法則に則して生きるかと問えば、四つの法則全般にわたるといえる。どの法則一つを欠いても人間は生きられない。しかし人間性の強調は上部層、心と精神にある。特に精神の存在は人間を宇宙における特異な存在たらしめる。もちろん、心、精神なくして下部層のみでも生命は保持できる。しかしそれは人間性の欠乏となる。人間領域における精神の地位は、世界構造における精神のそれとは違っている。確かに自然界においては精神は自然物に及ばず規定力をもたない。しかし人間領域では精神と心の与える力は大きい。精神が肉体を支配し、心の沈痛が肉体を死に至らしめることすらある。人間に生きる意味を与えるものは、文化人程、下部層より上部層にある。もっとも性欲によって文化生活を説明づける哲学があるが、これに対してはハルトマン論理がその誤りを指摘できる。すなわち下部層の強さがそのまま上部層へ再現しない。むしろ精神生活と性欲とは別の領域に属するものとして思考さるべきである。

人間生活における精神の占める位置は特種である。人間は上部層への依存度を強め、上部層によって下部層を規定すること——道德面において——を要求される。人間は道德者として道德的法則にそむく自由をもつ。これに対して人間は生きている限り人格であるから、この人格法則にそむく自由はない。生活行為の根源をなすこの人格の深層に分析のメスを入れ、唯一性、一回性の原理としての個性原理を引き出すことは不可能である。とはいえ、これを世界の原理へと還元すればヘーゲル観念論となる。

ここにおいて人格の原理を知ることができないが、その作用のみを知るといふ範疇に突き当たる。結局、自己の原理は自己によって実現するしかない。人格性は実現してのみ知られる。しかしこの人格の原理を精神の原理の上位に置くことはできない。むしろ唯一性と普遍性との調和が両者を併置させ、それらの包含関係が人格を向上させる。人間領域に存するこの人格の原理の出現は、世界の四層を五層とするものか、それとも四層の統一体としての一つの原理が存することになるのか明瞭でない。しかし現実には人格原理によって道德原理の取捨選択の行なわれていることは否定できない。

人間の生き方を方向づける最高価値は普遍性にある。従ってこの精神原理を範疇分析することは哲学の使命である。人格原理も下部層から独立したものでなく、多分に下部層からの影響を受けつつ統一原理を形成している。これは精神と肉体との完全分離によって、精神の優位を認めようとして来た従来の観念論に新しい視野を提供している。ハルトマンにおいても精神の優位、自由が主張される点ではそれと変りはないが、下部層への依存という条件をつけたことは、存在そのものに透徹した鋭い分析である。このために世界の四層それぞれに自由の存在を認め、精神の越境解を禁止する。それは観念論の制限であると同時にその崩壊でもある。

ところが世界から人間領域に目を転ずる時、四層の緊密な凝集をそこに発見する。人格原理には四つの層の法則が具現化している。もし人格原理に相当する世界原理があるかの如く考えれば、それは観念論の復活である。精神、人格は下から支えられ、またそれから独立なものであることの認識が、観念論克服から正しい主観の定立へと導く。そして観念論発生の根源へ立ち返り、そこから再び正しい主観の定立へと歩むことは、正しい認識関係を成立させ、客

観の自体的把握を可能ならしめる。

五 結 論

高次の層の基礎をなす存在対立の範疇層が数学的層の下部に存する。従って対立包含の組み合わせが存在層のそれぞれに浸透することになる。しかも対立しながら包含し合う存在形式は、範疇法則の根幹をなす依存して独立の共存思想を形成している。精神界までもこの共存によって貫き通す対立包含は、因果法則、目的法則の領域を構成する基礎的範疇である。しかし問題は目的性によってこの共存様式が思考されるかにある。観念論、實在論が目的思考によって世界を偏見解釈したとの批判は、ハルトマンの常套手段である。

対立包含を世界の根本構造とする世界の単純化は、現象の多様性というハルトマン自らの基本姿勢にまで違反し、世界構造を同一視するという誤りを犯している。哲学と科学の境を除去したハルトマンは、世界構造の究明に没頭する余り、人間における要請を無視している。観念論、實在論の偏見とされる発展思想は、なるほどこれによる世界の越境解釈は非とされるにしても、この思想は人間の生き方の根本を構成する。同時に共存思想も確かに人間の一つの生き方を形成している。しかも調和要請の偏見に基づく目的性が共存様式の中に読みとれる。そして解決なき対立は対立包含の形で調和した世界を構成する。従って階級社会の中で各自の自由をもつとなれば、共存思想は現代社会に對する一つの生き方を訴えかけている。

このようにハルトマン思想の中に観念論的要素が発見できるが、これは認識範疇と存在範疇との部分的な一致という認識図式にも窺知することができる。両者の一致において認識したものは、認識範疇であると同時に存在範疇である。この限りでは観念論の成立である。ハルトマン思想の危険性はこの点にある。むしろ認識範疇と存在範疇との一致に合理性が存在するのは、この両者の関係が認識でなく、了解の立場に立つといえる。これによって哲学は、自己本来の基礎に立つことになる。

- ① Der Aufbau der realen Welt S. 15 ② ibid., S. 15
③ ibid., S. 138 ④ ibid., S. 41 ⑤ ibid., S. 79
⑥ ibid., S. 108 ⑦ ibid., S. 223 ⑧ ibid., S. 163
⑨ ibid., S. 223 ⑩ ibid., S. 464-472 ⑪ ibid., S. 573
⑫ ibid., S. 597

参考文献

Nicolai Hartmann: Der Aufbau der realen Welt

〃 : Kategoriale Gesetze

ハルトマン著 実在的世界の構造 高橋敬視訳

〃 範疇法則 杉田・永島訳

〃 観念論と実在論との此岸 佐藤慶二訳

〃 ドイツ観念論の哲学(三卷) 長屋 日高 小松訳

〃 歴史哲学の基礎論 高橋敬視訳

ニコライ・ハルトマンの「範疇法則」による観念論批判

ニコライ・ハルトマンの「範疇法則」による観念論批判

一七六

〃 哲学方法論 橘高倫一訳

〃 哲学入門（上巻） 杉田勇訳

グロツクナー著 ヘーゲル復興と新ヘーゲル主義 大江清志郎訳

〈あとがき〉

「範疇法則」の詳細については

国士館法学・創刊号、二二三頁——二四五頁

ハルトマンの哲学思想——特に「範疇法則」について——杉田・永島著

国士館法学・第四号・二二九頁——二八九頁

ハルトマンの範疇法則論と中村階層理論——杉田・永島著
を参照されたい。